

京都大学大学院経営管理教育部

日南町におけるロジックモデルの作成について

北原 彩佳

現在、少子高齢化、過疎化の進む地方自治体では、様々な問題が生じているが、これは、今後日本各地で起こりうる問題である。ここでは、鳥取県日南町を対象とし、行政だけの力では成り立たなくなる今後を踏まえ、町の将来像やその実現のための方策等を町民主体で検討し、ロジックモデルを構築する。

1. はじめに

日本は現在急速に少子高齢化が進み、人口減少社会へと突入している。地方では、その傾向は顕著であり、高齢化率が 30%、40%の自治体も珍しくない。

高齢化が佳境に入っている地方においては、地域コミュニティの維持、自治体の財政問題、自然環境を含めた社会資本の維持管理、主力産業の衰退、若者の流出など多くの問題に直面している。

過疎化、少子高齢化に原因を發するこのような問題は、全国の過疎地自治体に共通する問題である。

このような地方自治体は、今後ポスト高齢社会に突入する。ポスト高齢社会とは、団塊の世代が鬼籍に入り、高齢化率の上昇が止まり、安定的な高齢社会になった状況で、人口形態が比較的スリム化した社会をいう。しかし、人口減少は続く訳であり、人口減少に歯止めを打つ必要性は依然そのままである。

このような現象は、今後 30 年で日本各地の自治体が陥るものと考えられており、過疎地地方自治体の現状は、「30 年後の日本全体の問題」と考えることができる。すなわち、日本の人口減少・高齢化問題の先端を進む過疎地域の問題を解決することが、30 年後の日本の社会問題を解決することにつながると考えることができる。

本稿では、現在、上記のような問題を抱えている過疎地、鳥取県日南町を対象とし、町を維持するために、町の目指す方向性や施策や行動等をロジックモデルとして作成し、過疎地のモデルとして検討していきたい。

2. 日南町ロジックモデルとは

ロジックモデルとは、町の現状の問題を認識した上で、町の将来の目標を設定し、その実現のために町の資源を活用しながら行政や地域、町民がどのような行動を行う必要があるかを、目標と実現のための方策の因果関係を明示しながら、系統立てて表現したものである。

日南町のロジックモデルとしては、以下のような特徴がある。従来のロジックモデルは、1)町の施策など、行政体の行動モデルであることが多い、2)ワークショップ等で町民の声を聞く機会はあるが、どう反映されている

かが不明確である、3)行政・大学・町民と一体となり取り組むことは少ない、といったものであった。

これに対して、日南町ロジックモデルは、1)ロジックモデルを町民の主体性を持つ行動モデルとする、2)町民の声を客観的に反映させ、どう反映させたかを明示する、3)大学、町、町民（個人、家族、地域、企業、各種団体等）が一体となり、様々な観点からのロジックモデルを作成する、という特徴がある。

ロジックモデルとして、因果関係を明確にすることで、合理的な政策策定や適切な政策評価が可能となり、政策の改善案を検討することができる。また、住民への透明性が高まるだけではなく、当ロジックモデルは、町民の行動モデルである点から、行政や住民、地域等町の各主体が同じ目標に向かい、その達成のために、効果的・効率的な行動を行うことができるのである。

下図が作成したロジックモデルである。



図 2-1 30 年後の日南町の姿プロジェクト
とりまとめ（案）

各項目を「町の将来像」「地域の取組みテーマ」「地域の取組みの方向性」「町イノベーションをもたらす取組みの方向性」「わたしたちにできること」の 5 つに分類した。

まず、「町の将来像」では、将来、30 年後の日南町の姿を一言で表したものである。「新しい時代の豊かさを創造するまち」や「死ぬまでずっと面倒を見てくれるまち」といった案がある。次の「地域の取組みテーマ」として、「町の将来像」を実現するために、3 つの取組むべきテ

一歩をあげた。町の産業や雇用である「しごと」、町民の日々の生活を支えるための「くらし」、日南町ならではのスタイルを提案する「たのしみ」、である。「しごと」では、資源を大切に「循環型社会」が必要とされている今、日南町がその先駆けとなるような、「日南町の資源を活かした持続可能な産業の進化」を、「くらし」では、「町民が安心・安全な暮らしができる町」を、「たのしみ」では「日南町のスタイルを誇りとし、発信する町」を目指していくこととした。そこで、「地域の取組みの方向性」では、「しごと」「くらし」「たのしみ」各項目について、どのような方策の方向性でもって、これらを実現していくか、ということを提案している。例えば、「しごと」については、「奥日野日南町ブランドの地場産業の成長」、「くらし」では、「新規居住の受け入れ」、「たのしみ」では「文化後継者の確保」などである。では、それぞれについて、その実現のために、具体的にどのような目標をもち、行動すべきか、という目標について「町イノベーションをもたらす取組みの方向性」で述べている。ここでは、「人財づくり」「動機づくり」「コミュニティづくり」「付加価値づくり」「健康づくり」「交通づくり」「環境づくり」の7つの取組みの方向性をあげている。そして、最後に「わたしたちにできること」については、今まで述べてきたことを実現するために、具体的に各主体が何に取り組むことができるか、ということが提案されている。個人では、「声かけ運動」「新チャレンジに対して応援の気持ちをもつ」など、地域では、「独居老人と地域・離れた家族との連絡網等による連携の確保」などをあげている。

3. 日南町について

鳥取県日南町は中国山地のほぼ中央に位置し、標高280m から 600m の間に大部分の集落と耕地が集まっている。東西に 25km、南北に 23km、という広がりを持ち、森林の占める割合が多く、総面積は 340.87 km²であり、人口密度は 19.1 人/km²である。他地域に比べ、産業で農業の占める割合が大きい。

1960 年から 2000 年の 40 年間で人口は 15286 人から半分以上の 6696 人に減少した。2000 年では、高齢者が全体の 42%の割合を占めている。今後も人口減少が続き、2030 年にはさらに半減すると考えられている。

また、MARG（過疎地研究会）が 1999 年から日南町において開催されてきた。

以上より、日南町は、日南町は日本の過疎化・高齢化を代表する町であるとともに、以前からの MARG との関連があるため、対象地域とした。

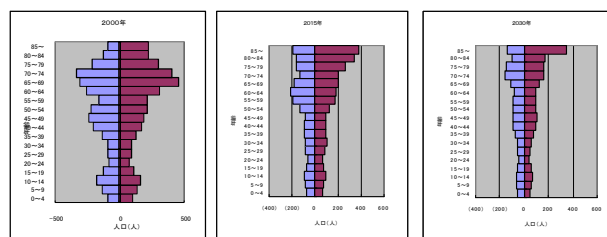


図3-1 2000～2030 年人口推移

4. ロジックモデル作成過程

ロジックモデルを作成するにあたり、「30 年後の日南町の姿プロジェクト」を発足させた。目的は、人口減少に伴う日南町に関わる諸問題を基に、MARG を中心とした有識者、町民、行政など町に関わる人々と、30 年後の日南町のあるべき姿を考え、ポスト高齢社会の過疎地のモデルとして、町民主体のロジックモデルを構築し、日南モデルを確立することである。

有識者会議やワークショップなどを通じ、町民の声を収集し、ロジックモデルを作成した。その際、毎回議事録を作成し、TFIDF 法という言語分析法を用い、科学的に客観的に分析し、ロジックモデルを構築した。

次にベースライン評価指標・アウトカム指標の検討を行う。ベースライン評価においては、図2-1「30 年後の日南町の姿プロジェクト」とりまとめ（案）の現状（2006）「人口減少」や「高齢化率」等について、各指標、それに伴うデータを収集した。これら各指標より、日南町の現状を把握した。また、アウトカム指標においては、同じく図2-1より「地域の取組みテーマ」「地域の取組みの方向性」の各項目につて、アウトカム指標を検討した。例えば、「しごと」については、「町民所得」や「若者定着率」、「くらし」については、「町民の満足度」、「たのしみ」については、「町内滞在時間」等を指標として提案している。

5. おわりに

別紙2「議事録—ロジックモデル対応表」からわかるように、これまでのワークショップでは議論されていない項目もある。このような項目に関しては、主観的に作成したものであるが、重要であると考えたものである。そのため、今後のワークショップで議論していく必要があると考える。また、新たなベースライン評価やアウトカム指標については、現状を把握したうえで、今後具体的な数値目標をたて、ロジックモデルを具体化する。

《参考文献》

- 1) 政策評価論授業『社会資本マネジメント論』
- 2) 市民参画型道路計画プロセス研究会『市民参画の道づくり』株式会社ぎょうせい
(平成 16 年 3 月 20 日)